



外見からはわかいにくい困り感～「感覚」

◎ 聴覚、皮膚感覚、味やにおい、温度などに、感覚的な過敏さをもっている子供がいます。そのことで、生活面で様々な不都合があるだけではなく、「**怠けている**」「**わがまま**」と誤解されてしまうことがあるのです。

◎ 声や音に過敏さがあるケース

- ・人の声がいろいろ聞こえ過ぎてうるさい。集団の中に入りたくない
- ・楽器の音やみんなの歌声が頭の中で響いている。だから音楽の授業に参加しない。

→「ちゃんとみんなといっしょにやりなさい」「真面目に授業に参加しなさい」

◎ 皮膚感覚に過敏さがあるケース

- ・他の人と触れてしまうことを恐れる。友だちと協力して活動できない。集団参加を嫌がる。自分に触れようとする人を攻撃してしまう。
- ・季節や気温に関係なく長袖だけ（半袖だけ）を着ることに固執する。

→「みんなと仲良くしなさい」「みんなと真面目にやりなさい」

◎ **感じ方の過敏さや本人の苦痛は、外見からはなかなかわかりにくいもの**です。

なので、矢印（→）のように注意されたり叱られたりしやすくなります。また、過敏さをわかってもらえても、「そのうちに慣れるから」「そのくらい我慢しなさい」と叱咤激励されてしまうこともあります。すると子供は「自分のことをわかってくれない」「叱られた」となり、気持ちが不安定になったり、意欲をなくしてしまったりすることがあります。

◎ それでは、どのように対応や支援をしたらよいのでしょうか。「音や声に過敏」であることを例にすると

☆ 苦痛に十分共感してあげる

☆ どのように対応したらよいかを本人といっしょに考える

例)小型の耳栓をする 手で耳を押さえる 一時的にその場から避難する など

☆ 叱咤激励をしたり“根性論”を持ち出したりしすぎない

◎ ☆印のような対応をしていると、**子供は安心感をもち、次第に自分でうまく対応できるようになっていくものです**。逆に、叱られ経験や無理強いが多くなってしまうと、むしろ感覚の過敏なところを気にしすぎたりこだわったりして、問題が大きくなってしまいます。

「なぜ、このようなことをやったのだろう」「どんなことで困っているのだろう」と子供の気持ちを考えながら、安心感をもたせてあげましょう。

※「こころのお便り」は、現役の情緒通級教諭が原稿を書き、深大出版で編集しています。

子育てに悩む保護者の方、児童を理解したい先生等どなたでもプリントしてお使いいただけます。